

研究専攻（専門領域）		日本・アジア研究専攻(日本文学)		学籍番号	08CS030
氏名	劉銀炅	ローマ字	YOU Eun Kyoung	国籍 (留学生)	韓国
修士学位論文名		「胡砂吹く風」に表れた半井桃水の朝鮮観			
提出年月日		2010年 1月 12日		指導教員	八木恵子
体裁 ( )		53項(1項文字数 1600字)		言語	日本語
別冊添付資料等					
キーワード		韓国観、朝鮮認識、半井桃水、「胡砂吹く風」、女性像			
<p>本研究は、日本人の朝鮮・韓国認識を探ることを契機とする。現代日本人の韓国認識を探るため、知らなければならないのが植民地化される直前である明治時代に絞った。明治時代に注目し、当時朝鮮について語った小説の中で、「胡砂吹く風」に焦点を当てた。「胡砂吹く風」は半井桃水が1891年から150回にわたって『朝日新聞』に連載した小説である。「胡砂吹く風」は朝鮮を舞台に、日本人の侍と朝鮮の両班女性の間にも生まれた林正元が、朝鮮にわたり母の仇を討ち、朝鮮の女性と結婚し、朝鮮王の最高顧問になるまでの話である。</p> <p>近代日本文学史上、政治小説とも分類されるが、小説に登場する人物たちが関係を結びながら広げる話は生き生きとして面白さを増している。今までの研究では「胡砂吹く風」の女性を「弱い＝朝鮮」と同じイメージとして捉えた論考が多い。朝鮮と日本の関係が被支配者と支配者関係だったことから、小説で描かれた女性は日本に救われるべき弱い朝鮮を象徴するということであった。しかし、「胡砂吹く風」を分析した結果、その中に描かれている女性たちは弱くて、誰かに助けられなければ生きられないような女性たちではなく、主人公に協力しながら個性的に生きている人たちであった。そして、当時の風景描写やある事件に対する主人公の態度などが朝鮮の現実を十分に理解していないと書けないものであった。風俗に関して知らない日本人に朝鮮について正しく分らせようとする努力も見えた。</p> <p>このような生き生きとした人物描写や事件に対する態度が文章の中で表現できたのは半井桃水が12歳から16歳までの少年期朝鮮の釜山で生活し、朝鮮文化を十分に理解していたからである。半井桃水が韓日国境の土地、対馬の人であったことも大きい。対馬の人は江戸時代から朝鮮との貿易を担当していたため朝鮮に対して日本本土の知識人よりも朝鮮について理解していた。</p> <p>半井桃水の韓国体験、その中から得た現実認識などが朝鮮と日本の関係を客観的な立場で見る視線は与えたかもしれない。そして、「胡砂吹く風」は他の朝鮮関連小説より生き生きとした風景や人々が描かれている。しかし、「胡砂吹く風」の続編である「続胡砂吹く風」からは生き生きとした風俗の記述も、人物描写も見つけることが出来なくなった。それは、著者である半井桃水が持っていた朝鮮に関する限界とも言えるものではないだろうか。その限界は半井桃水にだけあるものでない。当時朝鮮の反応、韓日関係、東アジアを巻き込んだ欧米の勢力などからの限界もなった。半井桃水は朝鮮理解者ではあったが、実践的に動く思想家ではなかった。小池正胤(1966)が言ったように、半井桃水は「明治の新聞記者としてのパースペクティブと、客観性と、それなりの国際事情に対する理解を持っていた」その中で、朝鮮を理解し、自分なりの朝鮮像、韓日関係の未来像を持って「胡砂吹く風」が書かれたのである。</p>					